

## 場面想定法を用いた相談場面におけるコンプリメン トの効果に関する検討：賞賛獲得欲求・拒否回避欲 求に着目して

川口, 智也  
九州大学大学院人間環境学府

白濱, あかね  
九州大学大学院人間環境学府

古賀, 聡  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1911209>

---

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 8, pp.25-36, 2017-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター  
バージョン：  
権利関係：

# 場面想定法を用いた相談場面におけるコンプリメントの効果に関する検討

— 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に着目して —

川口智也 九州大学人間環境学府 / 白濱あかね 九州大学人間環境学府

古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

## 要約

本研究は、相談場面の想定において、解決志向ブリーフセラピー (Solution Focused Brief Therapy: SFBT) の技法の1つであるコンプリメントを用いた際の効果を、調査対象者の心理的特性を考慮した上で検討することを目的とした。大学生176名に対し、①相談体験尺度、②賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島ら, 2003)、③相談後の問題への取り組み方について、コンプリメントを「努力への敬意」、「内的リソースの示唆」、「外的リソースの示唆」、「困難への理解」の4条件に分けて質問紙調査を実施した。因子分析の結果、相談体験について、解決への着目、相談相手への信頼の2因子が見いだされた。解決への着目の得点については「内的リソースの示唆」群が高く、相談相手への信頼の得点については「内的リソースの示唆」群が高くなる傾向にあることが明らかになった。また、賞賛獲得欲求が高いほど、「努力への敬意」および「内的リソースの示唆」が、解決への着目を高めるために有効であることが示された。さらに、「困難への理解」群において、問題へ取り組む力を弱める人が多いことが明らかになった。これらのことから、目的に合わせてコンプリメントの内容を考慮することが有効である可能性が示された。

キーワード：コンプリメント、SFBT、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求

## I. 問題

解決志向ブリーフセラピー (Solution Focused Brief Therapy: SFBT) は、1978年から1984年にかけて、ミルウォーキーのBFTC (Brief Family Therapy Center) のチームによって、ブリーフセラピー (短期/家族療法:BFT) より発展したものである (Lipchik et al., 2012)。DeJong & Berg (2013) は、「クライアントと協働してクライアントの満足のいく未来のイメージを作ること」と、「クライアントがこの未来のイメージを実現させるために必要な彼らの長所と力量について、臨床家とクライアントの両者が理解を深めること」を、SFBTでは目指すとしている。

SFBTの中で用いられる重要な技法の1つがコンプリメントである。例えば白木 (1994) は、コンプリメントについて、クライアントの行動に敬

意を表わし、評価することであると説明している。また、Trepper et al. (2012) は、コンプリメントについて、「クライアントがすでによく行っていることを確認すること、そしてそれらの問題がどのくらい難しいか認めること」と述べている。さらに、黒沢 (2008) は、「コンプリメントとは、繰り返すが、リソースをフィードバックすることである。それも、相手が、それが自分のリソースなのだと思わせ受け入れ、できればそれを活かし使えるようになることが大切だ。」と述べている。さらに、黒沢 (2008) は、リソースには内的リソースと外的リソースがあると述べ、前者は本人の能力や性格、後者は家族や友人、専門機関などがあてはまると論じている。このように、コンプリメントの定義は文献によって様々であるため、どのようなコンプリメントによって、どのような効果

が得られるのかについて検討する必要がある。

コンプリメントの内容や、コンプリメントによる効果についての実証的な研究は行われてきている(中村・山本:2009, 石丸ら:2013)が、その数は少ない。例えば、中村・山本(2009)では、コンプリメントをグループメンバー間で行いあうインタラクティブコンプリメントや、対象者自身の能力や長所を対象者自身に答えさせる質問をするというセルフコンプリメントを行うことによって、自尊感情尺度得点、特性的自己効力感尺度得点、肯定的感情尺度得点が高まることを示している。また、石丸ら(2013)は、コンプリメントの内容をカテゴリに分類し、「具体化」して伝えることがコンプリメントにおいて重要であるとしている。しかし、これらの研究においてコンプリメントを受けた者が、コンプリメントにおいて期待される体験をしているかについては示されていない。SFBTにおけるコンプリメントの効果を調査するにあたって、まずはSFBTにおいてコンプリメントに期待されている体験がなされているかを調査することが重要であると筆者らは考える。SFBTにおいてコンプリメントに期待されている体験としては、例えば黒澤(2008)の「相手が、それが自分のリソースなのだと思いき受け入れ、できればそれを活かし使えるようになること」などが挙げられる。

さらに、コンプリメントを受けた際に、具体的にどのような解決に向けた行動が見られるかについても調査する必要がある。なぜならば、コンプリメントを受けることによってSFBTで期待されるような体験が得られたとしても、その後解決に向かう行動が見られなければ、少なくともコンプリメントのみでは、解決を促したことにはならないからである。

また、先行研究より一定の効果があることが示されているコンプリメントであるが、コンプリメントのもたらす影響は、肯定的なもののみであるのだろうか。小島ら(2003)は、肯定的なフィー

ドバックが必ずしもフィードバックされた側に良い影響を及ぼすとは限らないことを指摘している。同研究では、賞賛獲得欲求が高い人に対する肯定的フィードバックは満足感をもたらすが、拒否回避欲求が高い人に対する肯定的なフィードバックは、「はにかむ」「くすぐったい」「照れる」「はじらう」といった、照れの感情をもたらすことが明らかにされており、場合によっては肯定的フィードバックが社会的脅威として受け止められる可能性を示唆している。コンプリメントが肯定的なフィードバックの一種であるとする、賞賛獲得欲求が高いほどコンプリメントは有効に働く可能性があると考えられるが、一方で、拒否回避欲求が高いほどコンプリメントは有効に働かなくなるということが仮説として考えられる。

以上のことから、本研究では、コンプリメントに期待される効果について述べられた文献をもとに相談体験尺度を作成する。そして、コンプリメントの内容によって、相談体験尺度の得点にどのような違いがあるかを調査する。また、コンプリメントを受ける側の特性として、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求に着目し、これらの得点が相談体験尺度の得点に影響するかについても調査する。さらに、コンプリメントを受けた際に、コンプリメントを受けた者が解決に向けてどのように行動するかについても調査する。

## II. 方法

### 1. 調査対象者と調査時期

X年12月に、A県内B大学の大学生102名、C大学の大学生41名、D大学の大学生18名およびE県内F大学の大学生15名の合計176名を対象に、個別自記入形式の質問紙調査を実施した。回答依頼時には、文書と口頭で説明合意を得た。なお、回答に欠損のあった1名をデータから除外した。回答者の性別は男性86名、女性90名であった。また、年齢は18~24歳( $M = 20.5, SD = 1.35$ )であった。

## 2. 質問紙の内容

### 1) フェイスシート

所属学部, 学年, 性別, 年齢について回答を求めた。

### 2) コンプリメントを受ける場面想定による自由記述

困難や問題について想定してもらうための刺激文を4種類作成した。この刺激文に続き, 相談に来てコンプリメントを受ける場面の刺激文を提示し, コンプリメントを受けた結果, 今後どのように困難や問題に取り組んでいくかについて自由記述で回答を求めた。この際, 困難や問題の状況についての刺激文には, 時間をかけて努力しているがうまく行かないこと, 内的リソース(能力や性格など), 外的リソース(相談に乗ってくれたり, 手伝ってくれる周りの人)の3つについての記述を必ず含むものとした。また, コンプリメントを行う主体は大学の学生相談室のカウンセラーとした。

ここで困難や問題を抱えている状況の想定を求めるにあたって, 今回対象者となる大学生がより想定しやすく, 日常で遭遇しやすい困難や問題の状況を設定する必要があった。そのため, 八田(2009)および李・酒井(2010)を参考に, 大学生の遭遇しやすい困難や問題の内容として, 対人関係および学業の問題を扱うこととした。なお, 大学生の対人関係の問題については橋本(1997)が, 対人葛藤, 対人劣等, 対人摩擦の3つに分けられると述べているが, 同研究によると, 特に対人劣等や対人摩擦の方が, 対人葛藤よりも遭遇しやすい問題であると示している。そのため, 対人関係の問題の場面としては, 対人劣等および対人摩擦の状況を設定することが妥当であると筆者らは考えた。対人劣等は, 相手が嫌な思いをしていないか気になる, 知人とどのようにつきあえばいいのか分からなくなった, といった, 劣等感を触発する事態やスキルの欠如などに関するものとされる。また, 対人摩擦は, あまり親しくない人と会話をした, 無理に相手に合わせた会話をし

た, といった, 社会規範から逸脱したものではないが配慮や気疲れを伴う対人関係がストレスをかけている事態であるとされる。

さらに, 刺激文の中のコンプリメントは, 先述の文献(白木(1994); Trepper et al. (2012); 黒沢(2008))における定義にもとづいて作成した。なお, 黒沢(2008)からは, 外的リソースに着目したコンプリメントと内的リソースに着目したコンプリメントの2種類を作成し, 合計で4種類のコンプリメント条件を作成した。具体的には, 白木(1994)の定義より, 「時間をかけて努力したことに敬意を評するコンプリメント」, 黒沢(2008)の定義より, 「内的リソースへのコンプリメント」と「外的リソースへのコンプリメント」, そして, Trepper et al. (2012)の定義より, 「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」の4つである(なお, 以下の図表中においては, それぞれを「努力への敬意」「内的リソースの示唆」「外的リソースの示唆」「困難への理解」と表記する)。

つまり, 困難や問題を抱えている状況で学生相談室に相談に行き, カウンセラーからコンプリメントを受ける場面を調査対象者に想定してもらい, 解決のためにどのように行動するかを自由記述で回答してもらうということである。なお, この調査では, 対象者ごとに刺激文中のコンプリメントの種類を4つのうちのいずれかに限定し, 被験者間計画で行う。困難や問題状況の刺激文および教示, コンプリメントの内容を表1に示す。

### 3) 相談体験尺度

de Shazer(1988), Harvey et al. (2012), 黒沢(2008), Lipchik et al. (2012), 白木(1994), Trepper et al. (2012)における, コンプリメントに期待される効果やコンプリメントの目的に関する記述をもとに質問項目を作成し, 調査を行った。教示は, 「以下の項目は, コメントをもらった時のあなた自身にどの程度当てはまりますか。最も当てはまると思うものに1つ○をつけてくだ

表1 質問紙における各場面の刺激文およびコンプリメントの内容

	想定を求めた場面	コンプリメントの種類	
場面1	あなたは、演習授業で発表をしなければなりませんでしたが、なかなか納得できる発表資料が作れず、毎晩夜遅くまで資料作成に取り組みました。友人や先輩とたくさん相談をして何かヒントを見つけようともしていました。しかし、全く作業は進まず、まともな発表資料を作ることができないまま演習授業の日が近づいてきています。そこで、あなたは学生相談室のカウンセラーに相談することにしました。相談に乗ってもらい、最後に一言、カウンセラーから以下のようなコメントをもらったとき、あなたなら今後どのように演習授業の発表準備に取り組みますか。出来るだけ詳しく書き出してください。	努力への敬意	非常に時間をかけて取り組んでいるのですね、よく頑張っていると思います。
		内的リソースの示唆	簡単には妥協しないからこそ、ここまで頑張れているのですね。
		外的リソースの示唆	相談に乗ってくれる、良い友人や先輩に恵まれているのですね。
		困難への理解	発表の内容は、かなり難しいテーマなのですね。
		努力への敬意	試験に向けてしっかり勉強時間を確保しているのは素晴らしいことだと思います。
場面2	あなたは、必要な単位のかかった、重要な試験を控えています。困っています。友人と一緒に勉強をしていますが、わからないところが多く、困っています。友人と一緒に勉強するつもりですが、それでも難しいところが多くあります。今、結末は悪く、このままではいけないと思ったあなたは、学生相談室のカウンセラーに相談することにしました。相談に乗ってもらい、最後に一言、カウンセラーから以下のようなコメントをもらったとき、あなたなら今後どのように試験勉強に取り組みますか。出来るだけ詳しく書き出してください。	内的リソースの示唆	このままではいけないと危機感を覚えてすぐ行動に移せるのは素晴らしいことです。
		外的リソースの示唆	一緒に勉強して高め合える友達がいるのは良いことですね。
		困難への理解	授業の内容はかなり難しいものようですね。
		努力への敬意	ずっと長い間苦学してきたんですね、よく頑張ったと思います。
		内的リソースの示唆	相手がどんな気持ちか考える優しさがあるからこそこの悩みですね。
場面3	あなたは知人の、Aさんとの関係で悩んでいます。Aさんは授業が一緒のときなど、必ずどこかで話す機会があるような知人です。Aさんと話していると、ずっと前からAさんに嫌な思いをさせてしまっているか気になったり、何をしゃべったら良いのか分からなくなる時があり、どのように付き合っていけばいいのかわからなくなっています。あなたの周りの友人は、気にすることはないと励ましてくれますが、このままではいけないと思ったあなたは、学生相談室のカウンセラーに相談することにしました。相談に乗ってもらい、最後に一言、カウンセラーから以下のようなコメントをもらったとき、あなたなら今後どのようにAさんと関わりますか。出来るだけ詳しく書き出してください。	外的リソースの示唆	励ましてくれる人がいるのは良いことですね。
		困難への理解	何をしゃべったらいいかわからなくなる人と付き合っていくのは難しいことですね。
		努力への敬意	気疲れするって思ってたのに、よく今ですべて頑張ってきましたね
		内的リソースの示唆	気疲れするのになんて優しいのですね。
		外的リソースの示唆	辛さを分かってくれる人が周りにいるのは良いことですね。
場面4	あなたは知人の、Bさんとの関係で悩んでいます。Bさんは授業が一緒のときなど、必ずどこかで話す機会があるような知人です。Bさんとは特別親しい関係ではないのですが、一緒に居る時話をすると、自分が無理に話を合せているような気がしたり、また、自慢話や愚痴などの、あまり聞きたくないことも聞かされて、どことなく気疲れします。あなたの周りの友人は、そんなBさんと話すことの多い自分に、大変だと同情してくれますが、あなたはBさんを悪者にするのも良くないと思っています。今ですべて、気疲れするとは思いますが、あなたなら今後どのようにBさんと関わりますか。出来るだけ詳しく書き出してください。	困難への理解	一緒にいて気疲れする人との関係って難しいですね。

さい。」とし、5件法で回答を求めた。

#### 4) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島ら, 2003)

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島ら, 2003) を用い、18項目について5件法で回答を求めた。なお、教示は、「普段のあなたについてお尋ねします。以下の項目は、あなた自身にどの程度当てはまりますか。最も当てはまると思うものに1つ○をつけてください」とした。

### III. 結果

#### 1. 各尺度の検討

##### 1) 相談体験尺度

相談体験尺度の12項目について、最尤法による因子分析を行った。因子数は、1.0以上の固有値が2つあったこと (第1因子から順に5.44, 1.46, 0.94) から2因子解を指定し、プロマックス回転を行った。その結果と因子間相関を表2に示す。第1因子は、解決するための能力の存在や活用、解決のための周囲の人や物の活用、困難に感じて

いたものの見方を変えることについての項目から構成されている。これらは、解決のためのリソースへ着目したり、困難や問題とと思っていたものの中から解決がすでに起こっている部分への着目を測定する項目であると言える。そのため、第1因子を【解決への着目】因子 ( $\alpha = .86$ ) と命名した。また、第2因子は、コンプリメントを受ける場面を想定した者から見て、相談相手が話を聞いてくれているか、自分のことを心配し理解してくれているかを問う項目で構成されている。そのため、第2因子は【相談相手への信頼】因子 ( $\alpha = .92$ ) と命名した。結果を表2に示す。

##### 2) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島ら, 2003) の18項目について、最尤法による因子分析を行った。因子数は、小島ら (2003) と同様の構造が得られるか確認するために2因子とし、プロマックス回転を行った。その結果、第1因子および第2因子ともに小島ら (2003) と同じ項目で構成されたため、小島ら (2003) と同様に、「人と

表2 コンプリメントによる解決志向尺度についての因子分析結果 ( $N = 175, R^2 = .62$ )

第1因子 解決への着目 ( $\alpha = .86$ )			第1因子	第2因子	共通性
1	(1)	自分には、困難を解決するための能力があると思う	.84	-.29	.51
2	(2)	困難や問題だと感じているものについての見方が変わると思う	.63	.12	.50
3	(3)	自分の、問題を解決する力に着目できるようになると思う	.81	.01	.67
4	(9)	自分の持っている、困難を解決するための能力を活用できると思う	.80	.07	.71
5	(10)	困難の中であっても、うまく進んでいる部分があったと思う	.62	.08	.44
6	(12)	自分の周りにある、困難を解決する上で力になってくれそうな人や物を頼れると思う	.45	.25	.40
第2因子 相談相手への信頼 ( $\alpha = .92$ )			第1因子	第2因子	
7	(5)	相談相手は、私の話をよく聞いてくれていると思う	-.03	.91	.80
8	(7)	相談相手は、私のことを心配してくれていると思う	-.07	.91	.76
9	(8)	相談相手は、私のことを理解してくれていると思う	.06	.88	.84
				因子間相関	.53

注：括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい」などで構成される第1因子は【賞賛獲得欲求】因子 ( $\alpha = .82$ )、「意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる」などから構成される第2因子は【拒否回避欲求】因子 ( $\alpha = .83$ )と命名した。

## 2. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が相談体験に与える影響の検討

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求から相談体験尺度の各下位尺度がどの程度予測できるかを検討するため、各コンプリメント条件において、【賞賛獲得欲求】因子得点と【拒否回避欲求】因子得点それぞれを独立変数、【解決への着目】因子得点と【相談相手への信頼】因子得点を従属変数として、強制投入法による重回帰分析をそれぞれ行った。

その結果、「外的リソースへのコンプリメント」および「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群においては、【賞賛獲得欲求】因子および【拒否回避欲求】因子は相談体験尺度の各下位因子を予測しない結果となった。また、「内的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群においては、【賞賛獲得欲求】 ( $\beta = .45, p < .01$ ) が正の方向へ【解決への着目】を予測することが示された ( $R^2 = .16, F(2, 43) = 5.40, p < .01$ )。さらに、「時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群においては、【賞賛獲得欲求】 ( $\beta = .53, p < .001$ )

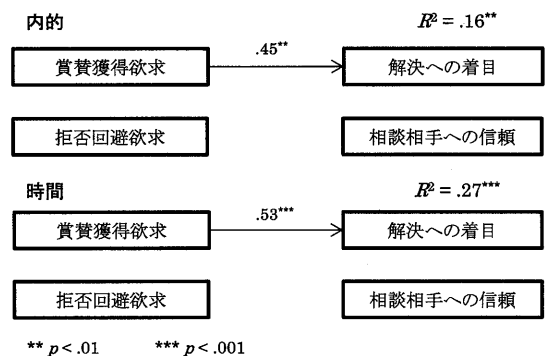


図1 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度が相談体験尺度に与える影響

が正の方向へ【解決への着目】を予測することが示された ( $R^2 = .27, F(2, 42) = 9.04, p < .001$ )。結果を図1に、各コンプリメント条件での相互関係を表3に示す。

## 3. コンプリメント条件による解決への着目得点の比較

コンプリメントの4つの条件を独立変数、相談体験尺度の【解決への着目】因子の点数を従属変数とした1要因4水準、被験者間計画の分散分析を行った結果、有意な主効果が見られた ( $F(3,171) = 3.65, p < .05$ )。Shaffer法による多重比較を行ったところ、「内的リソースへのコンプリメント」における得点が、「時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント」よりも有意に高いことが示された ( $p < .01$ )。結果を図2に示す。

表3 各コンプリメント条件における各変数の基礎統計量および相関係数

時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント (N = 44)			相関係数			
	M	SD	1	2	3	4
1 賞賛獲得欲求	2.84	.72	—	-.08	.43**	.09
2 拒否回避欲求	3.74	.71		—	-.08	.14
3 解決への着目	2.92	.60			—	.59**
4 相談相手への信頼	2.99	.72				—
内的リソースへのコンプリメント (N = 46)			相関係数			
	M	SD	1	2	3	4
1 賞賛獲得欲求	2.95	.72	—	.13	.45**	.19
2 拒否回避欲求	3.77	.78		—	.04	.06
3 解決への着目	3.31	.54			—	.50**
4 相談相手への信頼	3.34	.76				—
外的リソースへのコンプリメント (N = 43)			相関係数			
	M	SD	1	2	3	4
1 賞賛獲得欲求	2.84	.62	—	.09	.17	.19
2 拒否回避欲求	3.74	.63		—	.28	.25
3 解決への着目	3.13	.54			—	.46**
4 相談相手への信頼	2.91	.79				—
取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント (N = 42)			相関係数			
	M	SD	1	2	3	4
1 賞賛獲得欲求	3.08	.64	—	.07	.17	.01
2 拒否回避欲求	3.82	.65		—	.18	.19
3 解決への着目	3.16	.56			—	.59**
4 相談相手への信頼	3.33	.82				—

\* =  $p < .05$  \*\* =  $p < .01$  \*\*\* =  $p < .001$

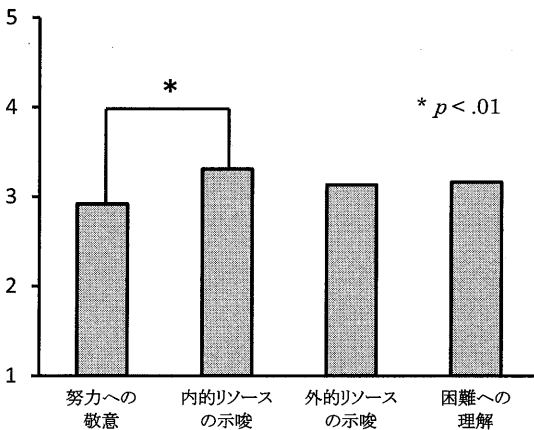


図2 【解決への着目】因子得点についての分散分析結果

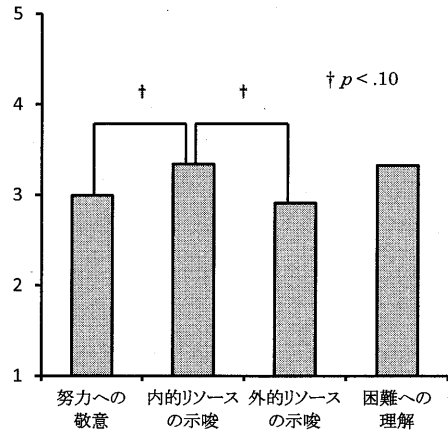


図3 【相談相手への信頼】因子得点についての分散分析結果

4. コンプリメント条件による相談相手への信頼得点の比較

コンプリメントの4つの条件を独立変数, 相談体験尺度の【相談相手への信頼】因子の点数を従属変数とした1要因4水準, 被験者間計画の分散分析を行った結果, 有意な主効果が見られた ( $F(3,171) = 3.61, p < .05$ )。Shaffer法による多重

比較を行ったところ, 有意差は示されなかった。しかし, 「内的リソースへのコンプリメント」における得点が「外的リソースへのコンプリメント」( $p < .10$ ) および「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」( $p < .10$ )における得点よりも有意に高い傾向が示された。結果を図3に示す。

## 5. コンプリメント条件による取り組み方の各カテゴリ出現数の比較

自由記述で回答を求めた、コンプリメントを受けた後の問題や困難への取り組み方について、筆者および臨床心理学を専攻する大学院生2名の計3名で協議しカテゴリ分類を行った。カテゴリは、「継続」、「増強して継続」、「弱めて継続」、「方略変更」、「記述なし」の5つに分類した。

実験協力者1人あたりの4場面における「継続」「増強して継続」「弱めて継続」「方略変更」「記述なし」の、カテゴリごとの出現数の合計を得点化した(0~4点)。その上でコンプリメントの4つの条件を独立変数、カテゴリの出現数の得点を従属変数とした、1要因4水準の被験者間計画の分散分析を各カテゴリについて行った。その結果、「弱めて継続」カテゴリについて有意な主効果が見られ( $F(3,158) = 3.79, p < .05$ )、Shaffer法による多重比較を行ったところ、「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」における出現数が、「内的リソースへのコンプリメント」( $p < .05$ )および「外的リソースへのコンプリメント」( $p < .05$ )よりも有意に多いことが示された。結果を図4に示す。

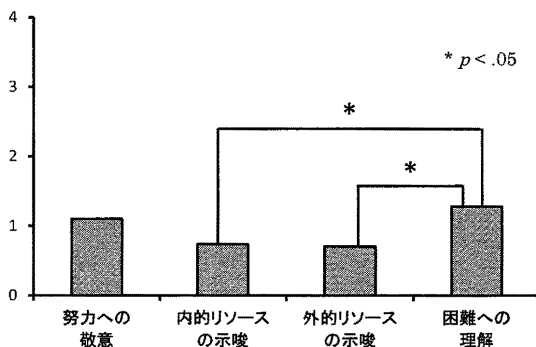


図4 「弱めて継続」カテゴリの出現数についての分散分析結果

## IV. 考察

### 1. 相談体験に賞賛回避欲求・拒否回避欲求が与える影響について

「内的リソースへのコンプリメント」および「時間をかけて取り組んだことに敬意を表するコンプリメント」を受け場面を想定するよう教示された群は、【賞賛獲得欲求】因子の得点が高いほど【解決への着目】因子の得点が高くなることが示された。これは、【賞賛獲得欲求】因子で測定しているものと、コンプリメントの内容が合致したためと考えられる。【賞賛獲得欲求】因子は、自身の能力や魅力、存在への賞賛の欲求を測定する項目で構成されている。一方で、「内的リソースへのコンプリメント」や「時間をかけて取り組んだことに敬意を表するコンプリメント」は、コンプリメントを受ける人自身の能力や努力を賞賛するものである。そのため、「内的リソースへのコンプリメント」や「時間をかけて取り組んだことに敬意を表するコンプリメント」は【賞賛獲得欲求】因子の得点が高い人に対して行うほど解決への着目を促すために有効であると考えられる。

一方で、「外的リソースへのコンプリメント」や「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」は、コンプリメントを受ける人自身のことではなく、その人の周りにあるものや取り組んでいる物事の難しさを認めるフィードバックであった。そのため、これら2条件のコンプリメントは【賞賛獲得欲求】因子で測定している欲求を満たす賞賛ではなく、これら2条件のコンプリメントでは【賞賛獲得欲求】因子が相談体験尺度の各下位尺度を予測しない結果となったと考えられる。

また、【拒否回避欲求】因子は、いずれのコンプリメント条件においても相談体験尺度の各下位因子を予測しない結果となった。小島ら(2003)では、【拒否回避欲求】因子が高いほど、肯定的フィードバックを受けた際に照れなどを感じやすくなることが示されていた。そのため、本研究に



においても、【拒否回避欲求】因子が高いほどコンプリメントを受ける想定をした際に照れを感じやすく、相談体験尺度の得点が低くなると筆者らは考えていた。この仮説が支持されなかった要因として、小島ら(2003)で用いられたフィードバックの場面と、本研究で用いたコンプリメントを受ける場面の性質の違いが考えられる。小島ら(2003)では、小集団で意見を出し合う状況で自分の発言する順番が回ってきたという場面を設定している一方、本研究では、カウンセラーに相談に行く場面を設定している。つまり、小島ら(2003)における場面では、肯定的フィードバックを行う人とフィードバックを受ける自分自身の他に、小集団のメンバーという第三者が存在したが、本研究において想定するよう教示されたのはコンプリメントを行うカウンセラーと、コンプリメントを受ける自分自身の二者のみで、第三者が存在しないという違いがあった。小島ら(2003)において見られた照れは、肯定的フィードバックを受けている自分を第三者に見られることによるものであったことが考えられ、本研究で設定した場面ではそもそも照れを感じられにくく、相談体験尺度の得点にも影響しなかった可能性がある。

## 2. コンプリメントの種類による解決への着目の程度の差について

相談体験尺度の下位因子である【解決への着目】因子の得点については、「内的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群のほうが、「時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群よりも有意に高いことが示された。黒沢(2008)は、「本人にとってわかりきったリソースよりも、まさかそれがリソースなんて、という意外性のあるものを納得できるようにフィードバックすることのほうが、はるかに治療的である。」と述べている。このことから、フィードバックする内容の意外性という面から考えると、時間をかけて努力したことに比べて、自

身に内的リソースがあるということがより着目されにくかったため、調査対象者がコンプリメントを受ける場面を想定した際の意外性が高まったと考えられる。なぜなら、時間をかけて努力したということは、努力をしたという肯定的な体験でもありながら、問題や困難に長い時間苦しんでいたという体験でもあるからである。そのため、物事がうまくいっていないという困難な状況を提示した今回の場面において、調査対象者が着目しやすかったと考えられる。

また、内的リソースがあるということが調査対象者に着目されにくかったと考えられる要因として、困難や問題の状況の刺激文も挙げられる。なぜなら、刺激文中において、時間をかけて努力しているがうまく行かないことについては、「毎晩夜遅くまで資料作成に取り組みました」などの直接的に時間をかけてきたことが書かれている一方で、内的リソース(能力や性格など)については、「なかなか納得できる発表資料が作れず」などの非直接的な記述となっていたためである。そのため、調査対象者にとって、内的リソースをフィードバックされた際の方が、意外性が高かったと考えられる。そして、意外性をもって内的リソースが受け入れられることによって、それまで問題や困難に向いていた目が、内的リソースを始めとした解決に向けられるようになったと考えられる。

また、「内的リソースへのコンプリメント」が【解決への着目】因子を促した背景として、提示された場面から、困難や問題の中にあつて自身がうまく出来ていない、自分の能力が足りないためにうまく行かないと考えていたところに、性格や能力について内的リソースへのコンプリメントという形で肯定的なフィードバックを受ける場面を想定することによって、問題へばかり着目していた状況から解決へ着目できるようになったということも考えられる。

## 3. コンプリメントの種類による相談相手への信頼の程度の差について

相談体験尺度の下位因子である【相談相手への信頼】因子の得点については、「内的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群のほうが、「時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群および「外的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群よりも有意に高い傾向にあることが示された。困難や問題の中にあつて、自身がうまく対処出来ていない、自分の能力が足りないと考えていたところに、性格や能力について内的リソースへのコンプリメントという形で肯定的なフィードバックを受けることによって、相談相手が親身になって話を聞いてくれると感じられた可能性がある。

#### 4. コンプリメントの種類による問題への取り組み方の差について

コンプリメントを受ける場面の想定後の問題への取り組み方については、「弱めて継続」カテゴリの出現数は、「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群が、「内的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群および「外的リソースへのコンプリメント」を受ける場面を想定するよう教示された群よりも多い結果となった。このことから、「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」を受ける想定をすることによって、うまく進まないのは自身のせいではなく、取り組んでいる物事そのものが難しいためであると感じられ、取り組む勢いや力を弱めるという行動が取られやすくなったことが考えられる。ただし、「弱めて継続」カテゴリには、「あきらめる」といった、問題への取り組みそのものをやめてしまう行動も含まれていた。この点から、問題の難しさをコンプリメントとしてフィードバックすることは、取り組んでいる問題が難しいなら解決できるはずが無いと感じさせ、解決を諦めさせてしまう可能性

も考えられる。

#### 5. まとめと今後の課題

本研究では、大学生の日常的な問題を扱い、4つのコンプリメントの条件によって、相談体験尺度の得点および、具体的な問題への取り組み方どのような違いがあるか、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の得点はどのように相談体験尺度の得点に影響するかを調査することで、より有効なコンプリメントのあり方を明らかにすることを試みた。

その結果、「内的リソースへのコンプリメント」が、コンプリメントを行う側への信頼を高めるために有効であり、とりわけ賞賛獲得欲求の高い相手に行うほど、解決的な部分へ着目させるために有効であること、「時間をかけて取り組んだことに敬意を評するコンプリメント」は賞賛獲得欲求の高い相手に行うほど解決への着目を促すために有効であること、「取り組んでいる物事が困難であることを認めるコンプリメント」は、問題や困難へ没入していることから脱することを促すために有効であるといった、コンプリメントの有効なあり方が示された。

これらが示されたことによって、内容を考慮してコンプリメントを行うことで、セラピーの目的に応じた、より有効なコンプリメントを行うことができる可能性が見いだされた。

ただし、本研究で用いた場面は実際の問題を扱ったものではないため、実際に何らかの問題や困難に直面している人がコンプリメントを受けた際の体験とは異なる可能性がある。また、本研究では、コンプリメントを受けていない場合や、相談相手が非SFBT的なアプローチを行った際については測定していない。コンプリメントを受けていない場合や、SFBT以外のアプローチからフィードバックを行った場合と比較した研究を行うことで、よりSFBTにおけるコンプリメントに特徴的な効果を明らかにすることが出来るであろう。

## 文献

- DeJong, P. & Berg, I.K. (2013) *Interviewing for Solutions, Fourth Edition*, Brooks/Cole, Cengage Learning. 桐田弘江, 住谷祐子, 玉真慎子 (訳) (2016) 解決のための面接技法第4版, 金剛出版
- Harvey Ratner, Evan George, and Chris Iveson (2012) *Solution Focused Brief Therapy 100 key points & techniques*, Routledge, 43-44
- 橋本剛 (1997) 大学生における対人ストレスイベント分類の試み, *社会心理学研究*, 13, 1, 64-75
- 八田純子 (2009) 大学生が抱える日常のトラブルと他者への開示について, *愛知学院大学心身科学部紀要*, 5, 41-47
- 石丸雅貴, 加野章子, 伊藤義美 (2013) 大学授業における WOWW プログラムの効果的なコンプリメント, *ブリーフサイコセラピー研究*, 22, 2, 86-95
- 小島弥生, 太田恵子, 菅原健介 (2003) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み, *性格心理学研究*, 11, 2, 86-98
- 黒沢幸子 (2008) *タイムマシン心理療法 未来・解決志向のブリーフセラピー*, 日本評論社, 199・287-288
- 李艶・酒井悠次 (2010) ストレスイベント・ストレスコーピング・社会的スキルの関連についての研究 一大学生の対人関係の場合一, *聖泉論叢*, 18, 53-65
- Lipchik, E., Derks, J., Marilyn La Court and Nunnally, E. (2012) 解決志向ブリーフセラピーの展開 Cynthia Franklin., Terry S. Trepper., Erick E. McCollum., and Wallace J. Gingerich. (Eds.) *Solution-Focused Brief Therapy: A handbook of Evidence-Based Practice*, Oxford University Press. (長谷川啓三, 生田倫子, 日本ブリーフセラピー協会 (訳) (2013) 解決志向ブリーフセラピーハンドブックーエビデンスに基づく研究と実践一, 金剛出版, 3-25)
- 中村大介, 山本真利子 (2009) インタラクティブコンプリメントの効果に関する実験的研究, *久留米大学心理学研究*, 8, 111-116
- 白木孝二 (1994) BFTC・ミルキーウォーカー・アプローチ 宮田敬一 (編) (1994) *ブリーフセラピー入門*, 金剛出版, 102-117
- Terry S. Trepper., Erick E. McCollum., DeJong, P., Korman, H., Wallace J. Gingerich., and Cynthia Franklin. (2012) *解決志向ブリーフセラピーマニュアル* Cynthia Franklin., Terry S. Trepper., Erick E. McCollum., and Wallace J. Gingerich. (Eds.) *Solution-Focused Brief Therapy: A handbook of Evidence-Based Practice*, Oxford University Press. (長谷川啓三, 生田倫子, 日本ブリーフセラピー協会 (訳) (2013) 解決志向ブリーフセラピーハンドブックーエビデンスに基づく研究と実践一, 金剛出版, 26-41)

**Effectiveness of compliments in scenes of counselling by the scene imagination method:  
Focusing on praise seeking and rejection avoidance need**

Tomoya KAWAGUCHI, Akane SHIRAHAMA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Satoshi KOGA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this research is to analyze the effects of compliment, which is a kind of technique in Solution-Focused Brief Therapy, in imaginary scenes of counseling, considering the subjects' psychological traits. For the above purpose, factor analysis of questionnaire responses from 176 college students was performed. The questionnaire covered (1) experiment of counseling scale, (2) praise seeking and rejection avoidance need scales, and (3) the approach to the problem after counselling, by using four types of compliments: respecting the effort, suggesting the internal resource, suggesting the external resource, and understanding the difficulty. Factor analysis of experiment of counseling scale yielded two factors: focusing on solution and reliance on counselor. The score of focusing on solution was larger in suggesting internal resource, and the score of reliance on a counselor was larger in suggesting internal resource. Additionally, a higher score of praise seeking need resulted in, a higher score of focusing on solution, in respecting the effort, and suggesting the internal resource. Moreover, on getting complimented for understanding the difficulty, majority of people had to put in fewer efforts to solve the problem. These findings show the effectiveness of optimizing the contents of compliment, considering the purpose of therapy.

Keywords: compliment, SFBT, praise seeking need, rejection avoidance need